

2021 年度「国際交流基金賞」受賞者決定

是枝裕和氏、宮田まゆみ氏、在ハノイ 3 大学、イルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏

国際交流基金が 1973 年以来実施する「国際交流基金賞」の 2021 年度の受賞者が決定しました。本賞は、学術や芸術等のさまざまな文化活動を通じて、日本と海外の相互理解促進に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人または団体に対して授与しています。

第 48 回となる今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となった昨年度の推薦分を含めた 101 件から、有識者による審査を経て以下の 4 件を決定しました。10 月 20 日に授賞式を開催いたします。

受賞者／授賞理由

■ 是枝裕和（映画監督）

世界の映画界を代表する監督の一人。市井の人々に寄り添い生活の機微を優しく見つめる一方、育児放棄された子どもたち（『誰も知らない』）や、万引きで生計を立てる疑似家族（『万引き家族』）を描き、現代日本の社会のありようを問いかけてきた。また、カトリーヌ・ドヌーヴ主演の日仏合作『真実』や、日韓で現在製作中の『ブローカー（仮題）』等、長年にわたり映画制作を通じた国際相互理解の推進に大きく貢献してきた。

■ 宮田まゆみ（笙奏者）

1979 年より国立劇場の雅楽公演に出演。笙のリサイタルに加え、ジョン・ケージ、武満徹、細川俊夫ら現代音楽界の巨匠による新作の世界初演を次々と行い、ニューヨーク・フィルほかとの共演や、ザルツブルク、ルツェルン等著名な音楽祭にも出演し、雅楽の伝統楽器の可能性を世界に向けて発信してきた。作曲家ヘルムート・ラッヘンマンのオペラにソリストとして出演、また振付家イリ・キリアンとの共演でも世界中で笙の魅力を伝え、長年にわたり雅楽の伝統楽器「笙」を通じた国際相互理解の促進に貢献した。

■ ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部 / ハノイ貿易大学日本語学部 / ハノイ大学日本語学部

日本語学習者数が世界第 6 位となったベトナム。この発展の背景に、日越両国間の経済交流や文化交流の発展があり、それを支える優秀な人材を育てたハノイ国家大学外国語大学、ハノイ貿易大学、ハノイ大学の 3 校の日本語教育の歴史がある。2017 年には 3 校が中心となって、ベトナム初の全国組織である「ベトナム日本語・日本語教育学会」を発足させ、各地での学会活動を展開している。

■ イルメラ・日地谷＝キルシュネライト（ベルリン自由大学教授）

ドイツのみならず欧州を代表する日本文学研究者、文芸批評家、翻訳者。半世紀以上におよぶ学究生活の中で、三島由紀夫らの現代日本文学を分析・解説し、私小説や日記といった日本独特の文学形式を考察する等顕著な業績を上げ、広く日本の文化・社会に関する理解の増進に大きく寄与した。また、長らくベルリン自由大学日本学科等の教授を務め、多くの後進の育成に尽力した。さらに、根気強く国際学術ネットワークを構築し、日独・日欧の間の相互理解を大いに促進してきた。

（各受賞者の詳細は後ページをご覧ください）

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■是枝裕和（映画監督）【日本】

Koreeda Hirokazu (Film Director) [Japan]

【授賞理由】

是枝裕和氏は、日本はもとより世界の映画界を代表する監督の一人である。監督のみならず脚本・編集まで一貫して自ら担当し、市井の人々に寄り添いながら彼らの生活の機微を優しく見つめる一方、育児放棄された子どもたちや、万引きで生計を立てる疑似家族を描いて現代日本の社会のありようを問いかける諸作品は、人間についての深い洞察に満ち、世界各地で高く評価されている。



是枝裕和氏 ©藤井保

1962 年東京都に生まれた是枝氏は、のちに『海よりもまだ深く』（2016）で描くことになる清瀬市の団地で少年時代を過ごし、母の影響で映画に親しむ。早稲田大学第一文学部に学び、文芸科の卒業論文として創作脚本を執筆している。番組制作会社テレビマンユニオンに入社すると、『しかし… 福祉切り捨ての時代に』（1991）をはじめとするテレビドキュメンタリーのディレクターとして頭角を現す。1995 年に劇映画の監督デビュー作『幻の光』でヴェネチア国際映画祭「金のオゼツラ賞」を受賞し、2004 年には『誰も知らない』がカンヌ国際映画祭で最優秀男優賞（柳楽優弥）に輝く。その後も話題作を次々に発表し、2018 年に『万引き家族』がカンヌ国際映画祭で最高賞パルム・ドールを受賞。これは日本人監督として黒澤明・今村昌平らに続く 4 人目の快挙であった。また、2011 年に西川美和監督らとともに制作者集団「分福」を立ち上げ、2014 年に早稲田大学基幹理工学部表現工学科教授に着任して映画制作を指導する等、後進の育成にも積極的に取り組んでいる。

是枝氏は早くから映画制作を通じた国際交流に意欲的で、『空気人形』（2009 年）では主演に韓国のパ・ドゥナ、撮影に台湾のリー・ピンピンを起用した。近年は、いっそう本格的に取り組み、カトリーヌ・ドヌーヴ、ジュリエット・ビノシュの二大女優をはじめ多くのフランス人スタッフ・キャストとともに日仏合作『真実』（2019 年）を撮り上げ、現在もコロナ禍の困難のなかで日本と韓国をつなぎ、ソン・ガンホ、カン・ドンウォンらの俳優や韓国人スタッフとともに『ブローカー（仮題）』を製作中であり、その完成が期待されている。

このように是枝裕和氏は長年にわたり映画を通じた国際相互理解の推進に大きく貢献してきており、その業績は国際交流基金賞にふさわしい。

【略歴】

1962 年東京生まれ。1995 年、初監督作品『幻の光』が第 52 回ヴェネチア国際映画祭で金のオゼツラ賞を受賞。以来、カンヌ国際映画祭（2004 年『誰も知らない』最優秀男優賞、2013 年『そして父になる』審査員賞、2018 年『万引き家族』パルム・ドール）、サンセバスチャン国際映画祭（2011 年『奇跡』最優秀脚本賞）、ヴェネチア国際映画祭等で国際的に高い評価を得る。2019 年、カトリーヌ・ドヌーヴとジュリエット・ビノシュを主演に迎えた日仏合作映画『真実』（原題：La Vérité）が第 76 回ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門のオープニング作品として正式出品。現在、自身初となる韓国映画『ブローカー（仮題）』を製作中。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■宮田まゆみ（笙奏者）【日本】

Miyata Mayumi (Sho musician) [Japan]



宮田まゆみ氏

【授賞理由】

雅楽の伝統楽器、笙演奏の第一人者である宮田まゆみ氏は、1979 年より国立劇場の雅楽公演に出演。1983 年より笙のリサイタルを開催し、注目を集めてきた。古典雅楽は言うまでもなく、現代音楽界の巨匠であるジョン・ケージ、武満徹、ヘルムート・ラッヘンマン、細川俊夫による新作の世界初演を次々と行う等、雅楽の伝統楽器の可能性を世界に向けて発信してきた。

共演したオーケストラは、サイトウ・キネン・オーケストラ、NHK 交響楽団をはじめ、ニューヨーク・フィルハーモニック、ベルリン・ドイツ交響楽団、バンベルク交響楽団、リヨン国立管弦楽団、BBC 交響楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ベルギー王立歌劇場管弦楽団等枚挙にいとまない。また、ザルツブルク、ウィーン・モデルン、ルツェルン、ドナウ・エッシンゲン、タングルウッド等、各

国の著名な音楽祭にも出演を果たしてきた。さらに 1998 年に開催された長野五輪冬季大会開会式での「君が代」演奏でも大きな注目を集めた。

ドイツの作曲家ヘルムート・ラッヘンマンのオペラ「マッチ売りの少女」では重要なソリストとして抜擢され、ドイツのハンブルクでの世界初演を皮切りにフランス、オーストリア、スイス、アルゼンチンを周り、チェコ出身のコンテンポラリー・ダンスの振付家イリ・キリアンとの共演でも世界中で笙の魅力を伝えた。

また、宮田まゆみ氏は基金賞受賞作曲家である武満徹（1993 年受賞）と細川俊夫（2018 年受賞）の多くの作品で初演・共演を世界中で重ねてきた。彼らの創作活動にも多大な影響を及ぼすと共に、長年にわたり雅楽の伝統楽器「笙」を通じた国際相互理解の促進に貢献してきており、その業績は国際交流基金賞にふさわしい。

【略歴】

国立音楽大学ピアノ科卒業後、雅楽を学ぶ。1979 年より国立劇場の雅楽公演に出演。1983 年より笙のリサイタルを行って注目を集める。古典雅楽はもとより、武満徹、ジョン・ケージ、ヘルムート・ラッヘンマン、細川俊夫等現代作品の初演も数多く、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラ、アンドレ・プレヴィン指揮ニューヨーク・フィルハーモニック、ウラディーミル・アシュケナージ指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、大野和士指揮ベルギー王立歌劇場管弦楽団、佐渡裕指揮ベルリン・ドイツ交響楽団、BBC 交響楽団、WDR ケルン放送交響楽団ほか国内外のトップオーケストラと数多く共演。ザルツブルク、ウィーン・モデルン、ルツェルン、タングルウッドをはじめ各国の音楽祭への参加、欧米各地でのリサイタルと幅広く活躍。

中島健蔵音楽賞（1993）、日本伝統文化振興賞（2004）、佐治敬三賞（2013）、松尾芸能賞優秀賞（2016）、芸術選奨文部科学大臣賞（2017）、紫綬褒章（2018）等受賞・受章多数。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部 / ハノイ貿易大学日本語学部 /

ハノイ大学日本語学部【ベトナム】

Faculty of Japanese Language and Culture, University of Languages and International Studies - Vietnam National University, Hanoi (VNU) /

Faculty of Japanese, Foreign Trade University [Vietnam] /

Department of Japanese Studies, Hanoi University



ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部
（「ULIS Japan Day」イベント）



ハノイ貿易大学日本語学部



ハノイ大学日本語学部

【授賞理由】

ベトナムにおける近年の日本語教育の発展には、目を見張るものがある。国際交流基金の 2018 年度日本語教育機関調査によると、学習者数で世界第 6 位であり、3 年前の 2015 年度調査と比べると 2.7 倍、機関数では 3.7 倍の伸びを見せており、学習者の増加数は世界一であった。また、日本語能力試験（JLPT）の受験者数は、初めて実施された 1996 年には 319 人であったが、22 年後の 2018 年には 69,843 人となり、219 倍の急拡大を遂げている。

これらの発展の背景には、良好な日越関係の下での日本との経済交流、文化交流の拡大、それに伴う日系企業の進出や日本での就職の機会の増加等があり、そのことが、最近の初等・中等教育における第一外国語としての日本語教育の開始をはじめとした制度の再整備等により影響をもたらしている。

このような発展の礎となってきたのが、今回の授賞対象であるハノイ国家大学外国語大学、ハノイ貿易大学、ハノイ大学（旧ハノイ外国語大学）の三校である。ハノイ貿易大学では、1961 年に日本語教育を開始、経済、外交・行政分野の人材を育成してきた。その後、1973 年に開始したハノイ大学では通訳・翻訳分野を中心に有為な人材を輩出し、2010 年には日本語専攻の修士課程を設置している。さらに 1992 年日本語教育を開始したハノイ国家大学外国語大学はベトナム唯一の初等・中等の正規教師を養成できる日本語教師養成コースを有し、2009 年にベトナムで最初の修士課程を設置している。三校が育んだ優秀な人材は、年月をかけて日越両国間の強い絆を創り上げてきた。同時に、連携してベトナムの初等・中等教育における日本語教育の拡大に貢献してきた。

さらに、日本語教育の機運が高まった 2017 年、これらの三校が協力してイニシアティブをとり、全国の日本語教育実施大学等と協議しベトナム初の全国組織である「ベトナム日本語・日本語教育学会」の発足を現実のものとし、ホーチミン市やフエ市で学会主催のワークショップを開催し、活発な学会活動を展開している。

このように長年にわたりベトナムにおける日本語教育を支え、優秀な人材育成、国際相互理解の促進に貢献してきており、その業績は国際交流基金賞にふさわしい。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■イルメラ・日地谷＝キルシュネライト（ベルリン自由大学教授）【ドイツ】

Irmela Hijiya-Kirschner (Professor, Free University of Berlin) [Germany]

【授賞理由】



イルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏
© Pablo Castagnola

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト教授は、ドイツのみならず広くヨーロッパを代表する日本文学研究者、文芸批評家、翻訳者である。1975 年にボーフム大学にて文学博士号取得後、一橋大学社会学部助教授、トリア大学日本学科教授を経て、1991 年から長らくベルリン自由大学日本学科教授を務めた。その間、ドイツ日本研究所所長、ヨーロッパ日本研究協会会長を歴任した他、ベルリン・ブランデンブルク学士院、ヨーロッパ学士院の会員に選ばれた。1992 年にゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞、1995 年ドイツ連邦功労十字賞、さらに 2001 年オイゲン・ウント・イルゼ・ザイボルト賞を受賞する等、輝かしいキャリアを歩んだ。

出世作となった博士論文(1976)では、三島由紀夫『鏡子の家』を、三島の他の作品のみならず、文学を構成する様々なサブシステムと関連づけ、構造主義的に再解釈し論じた。また、その名を高めた教授資格論文（1981 年公刊）は、私小説という日本文学に独特な文学形式を取り扱い、単なる自伝的な私事の吐露を超えて、著者＝読者＝文壇の間に成り立つ「文学的コミュニケーション過程」の表出として描いた。いずれも、文学作品を社会文化的なシステムの中に位置づけるものである。

教授が研究において、一貫して意識してきたのは異質性と普遍性の微妙なバランスである。『エキゾチックの終焉』（1988）で見られるように、教授は日本に関する安易なクリシェの流布を容赦しない。また、女流文学といわれるジャンルにも関心を抱き、石牟礼道子をはじめ多くの日本の女性文学者との交流の中で、その先進性と普遍性を見出していく。そこから、たとえば河野多恵子らが 1960 年代から描いていた性の倒錯に、世界史的な意味を見出す作業が展開された。他方、教授の卓抜した手腕は、日本の私小説や日記といった文学形式の異文化性、異質性をどこまでも他者にわかる普遍的な言葉で紡ぎ、他文化と接続して見せるところにある。その意味で教授は一流の翻訳家でもある。

教授は、長らくベルリン自由大学において後進の指導に当たり、多くの研究者を育ててきた。俳句から盆栽、日本食に至るまで、広く日本文化の紹介にも尽力する一方、東日本大震災の際に典型的に表れたように、日本理解の歪みの是正のためには論壇の最前線にも立つことを厭わず、日独、日欧の相互理解・友好親善にも大きく寄与してきたといえる。長年にわたるこれらの業績により、国際交流基金賞の授与にふさわしい人物といえる。

【略歴】

1948 年生まれ。一橋大学助教授、トリア大学教授を経て、1991 年ベルリン自由大学日本学科教授。ドイツ日本研究所所長（1996-2004）、ベルリン自由大学フリードリヒ・シュレーゲル文学研究大学院院長（2010-2015）を歴任。ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞（1992）、ドイツ連邦功労十字賞（1995）、オイゲン・ウント・イルゼ・ザイボルト賞（2001）、旭日中綬章（2011）ほか受賞多数。著作に『〈女流〉放談——昭和を生きた女性作家たち』（編、2018、岩波書店）、『私小説：自己暴露の儀式』（1992、平凡社）『和独大辞典』（Großes japanisch-deutsches Wörterbuch 全 3 巻、共編、2006-2021）等。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp